

“先輩”

第 14 期生 山崎 麻菜

小野ゼミの先輩方は、私にとって初めての“先輩”でした。というのも、私がこれまで経験してきた部活は、創部 1 年目であるためそもそも上級生がいない部活であったり、先輩と後輩の交流がほとんどない部活であったりと、なにか特別お世話になる機会がなかったからです。そんな私にとって、小野ゼミで過ごした 2 年間は、とてもかけがえのないものになりました。

私の小野ゼミとの 1 番の出会いは、個別説明会でした。自信に満ちて堂々と発表する 13 期さんに、強い憧れを抱き、入会を決意しました。ゼミ試に合格し、小野ゼミでの生活が始まった後も、先輩方への憧れは強まる一方でした。ゼミが開かれる度に、私たちが作成した資料をコメントいっぱいにして返して下さった先輩。〆切当日に、無事提出するまでパソコン室で見守って下さった先輩。助けてくださいと言えば、愚痴を言いながらも最後まで作業を手伝って下さった先輩。自分の活動でもないのにどうしてそこまで…と、驚かされると同時に、その貴重なお力添えには、いつも頭が上がりませんでした。

4 年生になり、15 期生が入会してからは、先輩から受けた恩を後輩に返していかなければ、と後輩の論文活動の進捗を気にかけてグル学に足を運んだり、共に徹夜で作業したり、役職が決まらないという相談を受け、役職会議を開いてみたりと、自分なりに“先輩”としての役目を務めるようとなりました。しかし、最後の本ゼミで、「後輩にできていないことがあれば、先輩には叱ってほしい。」という小野先生からの一言を聞いて、“先輩”としての役目を果たし切れていなかったことに気づかされました。私は、相手が辛そうな状況ならば、相手の気持ちを理解して優しく接することを意識していましたが、それは同期でもできることでした。私は、3 年生の時に素敵だなと感じた部分だけを、あるべき先輩の姿として切り取っていましたが、思い返せば、13 期の先輩方は、ただ優しく後輩指導をしているわけではありませんでした。例えば、日々の論文活動に疲れ果て、サブゼミでの発表をないがしろにしてしまった時には、「サブゼミ舐めてるなら、もう帰って。」と厳しい指摘をいただきました。大学院生さんも同様でした。第 1 回目の卒論発表において、参考文献をつけ忘れた者に対して、「小野ゼミで 1 年活動してきたとは思えない。」と叱ってくださりました。当時は気づきませんでした。私たちの至らない点をきつく叱って下さったからこそ、「次こそは。」というやる気に繋がり、1 回 1 回の発表を大切する姿勢が身についたのだと思います。そしてそれは、KUBIC、関マケ、および商学会賞といった成果に繋がった大きな要因であると確信しています。

今もなお、“先輩”として私の中で輝き続ける 13 期の皆様、忙しい時も丁寧に指導して下さる大学院生の皆様、未熟な先輩だったけれど、共に 1 年間を過ごした 15 期の皆、そして何より、2 年間たゆまず指導して下さった小野先生に、この場を借りて感謝の言葉を申し上げたいです。ありがとうございました。